様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２２年　４月１６日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2010
課題番号：１９５２０３３３
研究課題名（和文）清朝の言語政策と社会変動に係わる漢語の多層性に関する研究
－公用語の脈流を視座に－
研究課題名（英文）A Research on the strata of Chinese Related to Language Policy and Social Change in Qing Dynasty

研究代表者
藤田　益子（FUJITA ITSUKO）
新潟大学・国際センター・准教授
研究者番号：１０２８４６２１

研究代表者の専門分野：人文
科研費の分科・細目：言語学

キーワード：漢語、清朝、言語政策、公用語、官話、階級方言、旗人語、正音

１．研究計画の概要

(1)背景：これまでの研究を進める課程で、一般に北京語と称される言語の深部には来源の異なるいくつかの系統性を持った言語の脈流が存在し、時に平衡し、時に交錯しながら現代に至る様相が見えてきた。現代の中国の公用語は、普通話という規定に則り人為的に整備された言葉であるが、その原形とも言うべき清代の北京語は単純な一方言ではなく、北京に存在する様々な要素が複雑に絡み合いながら、柔軟性を具えた巨大な集合体を形成していた。この背景となった複雑な言語環境の存在故に、清代には幾度も言語政策が講じられ、政治的意向と社会的動向の絡んだ公用語の模索が続くことになる。最終的には、清末に外交交渉という外的必然性から方向性が決定され、北京官話が公用語としての地位を確立した。以下に「清代の言語政策と関係する言語」及び「社会的動向と主要言語の移行」の関係を整理する。

(2)目的：清朝は満洲族による支配であったため、漢語の流れに対して、従来とは全く異なる民族性、地域性、政治体制が複雑な影響を及ぼした。これらの要素に起因する言葉の脈流は具体的にはどのような語彙体系を成し、漢語史の中で、いつ、どこで、どのように形成され、盛衰していったのかを考察したい。言葉の脈流としてはⅰ.満洲語の漢語への影響、ⅱ.正音、ⅲ.南京官話・北京官話、ⅳ.旗人語等が考えられ、背景の社会的動向としては、(ｱ)少数派民族の多数派支配による共生、(ｲ)満洲族の華化、(ｳ)外交交渉のための公用語の必要性、(ｴ)政治制度に関わる特殊階層等の問題が考えられる。そこで満漢合璧資料、満洲語を多く使用した小説、欧文官話資料、旗人による白話小説資料などの関係資料等から語彙・文法事項を収集し、比較対照する。これにより、語彙の盛衰に関する語彙レベルでの対立や共存の現象が観察出来、同時に相対的な脈流の実態も把握することが可能となる。以上の方法から、17 世紀から 20 世紀初期の満洲族統治下における民族、階級、地域間の言語交錯と公用語の関係を調査し、内包する脈流を視座に、清朝の言語政策及び社会変動に係わる漢語の多層性について明確にすることを目標とする。

２．研究の進捗状況

(1)第一段階として、「少数派民族の多数派支配による共生」と「満洲族支配という特殊状況下での漢語への影響」というテーマを中心に考察を進めた。清朝成立後、北京では内城に旗人が入りその言葉が基準となったため明代の北京語に対して断層を持ち、河北方言の影響や古い形を残すとの指摘もある。そこで、満洲語と周辺方言の漢語語彙への侵入状況を検証するため、満漢合璧資料を基に、漢語資料と対比することにより、「特に北方方言や北京語に入り込んでいる満洲語」や「満洲語の影響を受けた漢語語彙」等の整理を行ない漢語への影響の考察を行った。

(2)第二段階として、「満洲族の華化」と「公用語への指向性」に関わる問題に取り組んだ。正音は、雍正期、福建語・広東語の話者を対象とした公用語教育のためのもので、音注は南音、語彙は北方という説もあるが、いずれ

も南京のものであるという説もあり、語彙に関する実態は不明である。そこで正音の語彙を整理し、これまでの研究で蓄積した北京語語彙とこの第二段階で行なう南・北官話との比較対照を通してその実態を解明することを目標とした。共通語を教育するようなシステムが無かったため、雍正六年に上諭によって、福建省諸県の「正音書院」設立や、広東省の「粤秀書院」等の書院の支援が行なわれ、教科書として『正音摂要』、『正音咀華』等も編纂された。ただし、清代の正音書は旗人の手によるものが多く、例えば、『正音辨微』道光十七年刊本や『正音咀華』咸豐癸丑刊本を編纂した莎彝尊も旗人である。そのため、語彙分析に際しては、第四段階での旗人語の研究と合わせて検証する必要が残っている。

(3)第三段階として、「外交交渉のための公用語の必要性」と「南京官話・北京官話の対峙」に関わる問題について考察を進めた。清代の『語言自邇集』等の欧文資料の他、北京と南京の語彙を併記した九江書會『官話指南』、『官話類篇』等を活用し、南京と北京の官話対照作業を行った。目的は、南・北官話の特徴的な語彙の選定である。欧文資料は「文言白話混淆体」に注意し口語を中心に整理を行った。明末清初、外国からは南京官話が規範と見られていたが、アヘン戦争以降、外交交渉において北京官話が必要となり主流が北京官話へと移行する。この欧文官話資料の性質の違いを活用した対照研究を試みた。正音を官話と等しく見る考え方もあるが、「正音の語彙＝官話」と結論付けることは出来ず、更に検討の必要性がある。また、『語言自邇集』「談論編」は、『清文指要』が元になったもので、更に同じ系統の版本として、『初学指南』、『三合語録』等も存在しているため、欧文官話資料と清文系資料との比較対照に拠って、北京官話資料と満漢合璧資料との相違を検証した。

３．現在までの達成度
②おおむね順調に進展している。
　基本的に申請時の計画に従い進行している。一部、未確認の資料があるが、今年度の8月から9月に、北京等の海外の図書館で資料を収集する予定である。

４．今後の研究の推進方策
(1)第四段階：「政治制度に関わる特殊な階層」と「階級方言の成熟及び通用化」。旗人語とは、旗人の階級的方言を指し、満洲語と漢語の両方、或いは相互に影響を受けた言葉が含まれる。明代に河北方言が満洲の地帯に伝わり、清朝になって旗人が北京に古い言葉を逆輸入したとの指摘もある。親族呼称等は現代漢語でも使用されるが、旗人語に関する研究は現段階では少ない。時代毎の満・漢語の文法・語彙の均衡や実態について調査し、平行して存在した正音や官話との対比を通して全容を解明する。

(2)第五段階：「清朝の政治的統治力の盛衰」と「言語の関係」。清朝の融和政策と隔離政策は、漢語と満洲語に如何に作用し、最終的にはどう漢民族文化に飲み込まれていくことになるのか。そして全てを内包した漢語は、如何なる多層性を持った言語になったのか。漢語史上、清朝政府の存在と変容はどのような意義を持つのか。背景にある社会制度、特に言語政策や教育制度をつぶさに調べ、漢語との相互関係や具体的な言語現象にどのような影響を与えたのかを分析する。これまでの言語学の領域を超え、政治制度と政策的言語統制に関わる広い視野に立って、複合的な漢語通時研究を行なう。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
①藤田益子、“把”構文における賓語の性質と量詞の機能について－『児女英雄伝』を中心とした“把＋個＋N＋Vp”構文の認知に関する考察－、『新潟大学国際センター紀要』、第6号、18－73頁、2010年、査読無
②藤田益子、『児女英雄伝』における“被”構文－『敦煌変文』,『紅楼夢』との対照に拠る考察－、『環日本海研究年報』、第 16 号、76-106頁、2009年、査読有
③藤田益子、トーマス・ウエードと漢語会話テキスト－『語言自邇集』の言語観－(二)『語言自邇集』、『問答篇』、『三合語録』、『清文指要』、『初學指南』の対照、『新潟大学国際センター紀要』、第 4 号, 10-21 頁、2008 年、査読無

〔図書〕（計１件）
①藤田益子、『児女英雄伝』の言語に関する研究、白帝社、880頁、2010年

〔その他〕
ホームページ
http://jglobal.jst.go.jp/public/20090422/200901059127214452